1月1日のメッセージ

聖書:ルカによる福音書 2: 21-40

「この目で救いを見た」

「明けましておめでとうございます。」

2023年の最初の日を礼拝から始められる幸いに心から感謝します。残念ながら本日、皆さんと同席することはできませんが、3年ぶりに違う場所で、皆さんと共に恵みを味わっている姿を想像していていただければと思います。

しかし、一年の最初の礼拝にもかかわらず、聖書日課で指し示された聖書の言葉はなんだか不吉です。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり/この僕を安らかに去らせてくださいます」(ルカによる福音書 2:29)。初めの日なのに、これから全てが始まる時であるはずなのに、シメオンは自分が世を去ることを喜んでいるように見えます。

なぜでしょうか。

それはもちろん、救い主に出会うことができたからでしょう。それと同時に、「やっと待ち続けていたその時が来た」喜びでもあったことでしょう。

シメオンは、「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けてい」(ルカによる福音書 2:26)ました。「死なない」ということは長生きしているということです。けれども、長命であることは喜びではあるのですが、一抹の寂しさも含んでいるのではないでしょうか。ただ一人、生き続けることには、多くの別れがつきものです。時には、失う傷の大きさに耐えがたいこともあったかもしれません。

それでも、シメオンは諦めずに待ち続けました。「わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です。」(サムエル記上1:28)と言った、サムエルの母アンナのような心境だったのかもしれません。

たとえ、ただ一人で残されたとしても、毎日神殿に詣でて待ち続ける人生をシメオンは選びました。「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです」(詩編84:11)と歌った詩人のように、「その時」が来ることを待ち続けました。たとえ、自分の人生がどうなろうとも、神から与えられた人生を全うしようとしました。パウロの言葉を借りるなら、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げ」(ローマの信徒への手紙12:1)て生きました。

だから、「安らかに去らせてくださいます」(ルカによる福音書 2:29)は、「やっと長かった苦しい時が終わる」との安堵の言葉ではありません。

「わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」(ルカによる福音書2:30)

その喜びを最大限に表す言葉です。これまで全て神に委ね、神と共に歩んできたことが、やはり正しかったのだとの安心でもあるでしょう(「万軍の主よ、あなたに依り頼む人は/いかに幸いなことでしょう。」詩編84:13)

この後、シメオンがいつ、神の御許(みもと)に召されたか、聖書は何も語りません。しかし、その最後の日まで彼は、「わたしはこの目であなたの救いを見た」喜びを表し続けたことでしょう。

私たちは一週前、救い主の誕生を共に喜びました。そして今日、また救い主の姿を見ました。この喜びは私たちの全身を包んでいます。いつ何時、どのようなことが起ころうとも、喜びを伝え続けたシメオンの後に続きましょう。与えられた道を神に委ねながら、この一年を精一杯走り抜こうではありませんか。

